

一、『源氏小鏡』の諸本分類再考

同志社大学（院） 酒瀬川なおみ氏

『源氏小鏡』は、南北朝期ごろから近世にかけて世間に最も流布した『源氏物語』の梗概書の一つである。その内容は物語の和歌、寄合の詞、梗概本文によって構成されており、それぞれの伝本に多くの増補、削除や改訂が認められている。すでに先学によって諸本の分類が行われているが、未だ見直す余地があると考えられる。本発表においては、『源氏小鏡』の諸本を和歌、寄合、本文のそれぞれの観点から分類していきたい。

二、『夜の寢覚』第一部の構想―男君の「率る」表現を端緒として―

立命館大学（院） 石橋孝氏

『夜の寢覚』第一部（巻一・二）に特徴的なこととして、男君が主人公・女君を「率」ようと考える箇所が見られる。『夜の寢覚』以前の作品においても、男性が女性を連れさるという話型の例を確認できるものの、『夜の寢覚』の場合、男君が女君を連れさることを実行しない点が大きな特徴である。この「率る」表現が、鼎立関係にある男君・女君・大君それぞれの苦悩を導くという構想につながる可能性を提示する。

三、『萬水一露』の成立過程の再検討―陽明文庫蔵『源氏物語註』の紹介をかねて―

関西大学 松本大氏

能登永閑『萬水一露』は、『源氏物語』の注釈書であり、連歌師宗碩の聞書をもとに、永閑説や先行諸注を加えた内容を持つ。今回の発表では、これまで未紹介であった陽明文庫蔵本を用いながら、『萬水一露』の成立過程に関する従来説の見直しと、注釈内容の差異から窺える施注態度の変容を指摘する。特に、従来説では関与が限定的とされてきた松永貞徳の所作について、注記内容の増補にまで深く関わっていた可能性を論じる。